「日々の理科」（第 1776 号）　2019,-5,20

「キビタキ（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

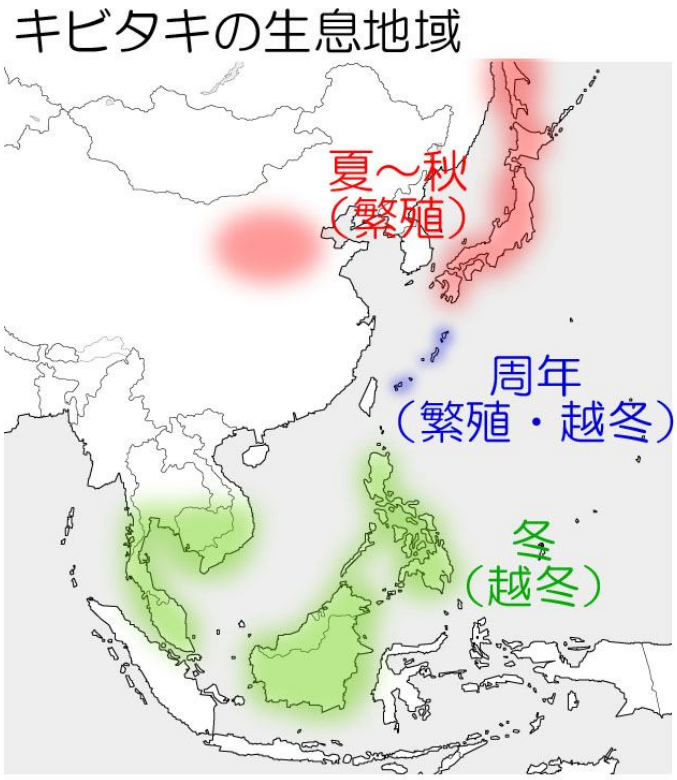
田中　千尋　Chihiro Tanaka

４月下旬から５月上旬にかけては、北軽井沢には普段は見かけない野鳥が来るようになる。その中の一つに「キビタキ」がある。

キビタキは冬の間には姿を見せない。カラマツが新芽を開き始めるころに、山荘の庭に必ず姿を現す。このモミジを剪定した枝がお気に入りのようで、まずこの枝にとまってから、ほかの枝に移る行動が見られる。「止まり木」にも、個体ごとに定位置があるのだろう。

「キビタキ」*Ficedula narcissina*　ヒタキ科

漢字では「黄鶲」と書く。「黄色いヒタキの仲間」という意味だ。眼の上、胸羽が鮮やかな黄色で、遠くから見てもまず見間違うことはない。



作図；C.Tanaka

シジュウカラやヤマガラとちがって、キビタキは「渡り」をする。冬の間は東南アジアの、インドシナ半島、マレー半島、ボルネオ、フィリピンなどの熱帯地方で越冬する。春になると数千 km も北上し、日本列島、樺太、それに中国の一部で繁殖をする。このような渡り鳥は「夏鳥」と呼ばれている。南西列島や奄美諸島では、越冬と繁殖の両方が見られ、留鳥になっている個体もあるようだ。

なぜこんなに小さい野鳥が何千 km も渡るのか、不思議でならない。一年中沖縄か東南アジアで生活すればいいのにといつも思う。繁殖期になると、エサ（昆虫やクモ類）が豊富な日本の野山が有利なのだろうか。いずれにしても、数千 km を飛行してきたかわいらしい野鳥に、敬意を表したいと思った。